



九 祭りの後

「ああ、そろそろ、盆踊りもやめるか」

「そうじゃな。久しぶりに、踊り続けたから、腰が痛くてかなわんわ」

「足もあがらんようになってきた。地面を摺り続けて、小石にでも引っかかって、こけそうになるわ」

「年はとりたくないの」

「お互いにな」

「それじゃあ、元の地中に戻るか」

「ああ。戻ろう。戻ろう。子孫たちも、今度の件では、少しは性根に入ったじゃろ」

「喉元過ぎれば何とか、かもわからんがなあ」

「また、その時には、地中から出てきたらええんじゃ」

「そうやな。忘れた頃にやってくるというしな」

「わしらは災害か」

「そうじゃ、人災じゃ。子孫たちがわしらを邪険にして、ほおっておくからじゃ」

「その子孫たちもじきにわしらの後輩になるじゃがなあ」

「目先の事しか考えてないからなあ」

「地中に入るまでは、あんたもそうだったやろ」

「痛いところくなあ」

「なあに、みんな傷だらけじゃ。それよりも、地中に戻る話に戻ろう」

「おおう、そうじゃ、そうじゃ」

「年を取ると、忘れっぽうなって困るなあ」

「わしらだけ地中に戻るわけにはいかんじゃろ」

「そうやなあ。他の全国の仲間にも知らせんといかんなあ」

「ああ、わかっとる。わかっとる。地下水脈がつながっているように、この地下ゾンビ脈も全国に網目のように張り巡らしとるんじゃ。一瞬で、情報は届くはずじゃ」

「ほんなら、頼むで。ああ、腰が痛い。サロンパスを張ろう」

「それなら、これからはお墓や仏壇にサロンパスをお供えしてもらわなあかんで」

「忘れ取ったわ。今回はしょうがないわ。地下水脈の温泉でも浸かるか」

「その方がええ湯やで」

「それは、おじんギャクかいな」

「指摘せんとしてくれ。さらりと、お湯に流してくれたらええんや」

「ほんなら、源泉かけ流しやな」

「そうや。温泉や、温泉や」

「ゆっくり浸かろう」

「お酒はあるか」

「お供えにワンカップ酒があつたはずや」

「酒の肴は」

「お供えにバナナとりんごがあつたはずや」

「それでは着にならないで」

「しゃあないやろ。お供えに生臭いもんはおかんからなあ」

「バナナで我慢するか」

「みんなに連絡してから、わしもすぐに行くわ」

何回目かの休憩をした。それでも、大石は名前の通り、伏せたままで微動だにしなかった。いや、動いたものもある。石に付着していた泥や汚れなど、埃成分は除去され、知らないうちに大石はピカピカに磨かれていた。

だが、自分たち人間の力だけで動かそうという誇りは微塵に崩れ去った。もちろん、誇りを失う前に、丸太坊を使って、てこの原理を応用した試みや、神聖な場所にも関わらず、非常手段として、軽トラを使って大石を引っ張ろうとした作戦も見事に失敗に終わった。ゾンビ踊り以上の疲れを中垣たちはどっと感じていた。

「郷土先生。やっぱり無理ですよ。根性だけでは大石は動きません。ブルドーザーか何か、特別の重機を使わないとこの岩は動きませんよ」

中垣が悲鳴のような声で訴えた。郷土先生も、百メートル走をスタートダッシュしたものの、わずか十メートルの距離で右足のふくらはぎが吊り、左足でけんけんをしながらゴールを目指しながらも、いつりタイアしようかと考えている失速したランナーのように、今は落ち葉を座布団にして座り込んでいた。

「この神聖な場所に。ブルドーザーを中に入れるわけにはいかない」

疲れ果てながらも自治会長がそれだけは強く反対する。

「でも、神社の本殿を建て替えするときには、地面をならすために、ブルドーザーや大型トラックなどが入るんじゃないですか」

「それはその時だ。御神体の岩を動かすのと本殿の建て替えとは違う」

「じゃあ、どうするんです。このままじゃあ、みんながゾンビになる前に、倒れてしまいますよ。倒れてしまえば、ゾンビになりますよ」

「うーん」

いい考えは浮かばない。みんなは黙り込んでしまった。沈黙だけが続く。広場からは、ダンシングヒーローの音楽が聞こえてくる。だが、この大石の周りにはヒーローはいない。誰一人としてヒーローになれない。

「よいこらしよ」

誰かが立ち上がった。さっきまで、みんなが大石と格闘している姿を焦点が合わない目で、呆けたような顔つきで見ていた大西さんだ。大石の龍伝説の由来をしっかりと説明してくれた後は、全てに疲れてしまったように、大石の近く椅子のような石に座って、中垣たちがする行為を見ているのか、見ていないのか、判然としないまま、呆然としていたはずだ。その大西さんが動いた。

「さあ、動かすで」

大西さんが大石を押し始めた。

「おばあちゃん。無理ですよ。さっきから僕たちが一生懸命大石を動かそうとしていたのを見ていたでしょう。僕たちだけでは無理なんですよ」

中垣は自分を諭すように俯いたままだ。それでも、大西さんは大石を押し続けている。

「あんたらは根性が足らんのじゃ。強い意志があればなんとかなる。なんせ、相手は石やからなあ」

「そんなあ」

中垣は大西さんのおぼんギャグに、あきれたように口を開けたまま見つめる。

「そうだな。確かに大西さんの言う通りだ。ここで諦めたら、試合は終わりだな」

郷土先生も立ち上がった。どこかで聞いたようなセリフだ。だけど、そのセリフは感染症のようにみんなに一斉に伝染した。みんなも立ち上がる。そして、大石にまわりつくと、再び押し

でした。すると、大石がわずかだが、ほんのわずかだが動いたような気がした。ささやかでも、これまでにない実感だ。

「う、動きましたよ」

中垣の顔はヒマワリの花が咲いたかのように明るくなった。

「ああ。確かに、動いたような気がする」

郷土先生の顔には朝顔の花が咲いている。そして、自治会長を始め、木本さんなど、大石を動かしている人たちの顔にもそれぞれ、百日紅など、夏の花が咲いた。

いける。中垣はそう確信した。大西のおばあちゃんが必死で取り組む姿にみんなの心に火が付いたのだ。彼女だけには任せられない。彼女を応援しないと。

大石は一ミリ単位で動き始め、穴は大石に隠れてとうとう見えなくなった。

「やったあ。穴が塞がったぞ」

中垣がこれまでの疲れが吹き飛んだかのように、大石に飛び上がれるくらいジャンプをして、喜びを表現した。だが、その時、ヒューと言う音が穴に吸い込まれていった。

「いや。まだだ。まだ、隙間があるはずだ。念には念を入れよう」

郷土先生が最後のダメ押しをする。みんなも最後の力を振り絞った。穴は完全に見えなくなった。

「やりましたなあ」

自治会長が顔中を皺だらけにして喜んでいる。その顔は達成感に溢れていた。みんなも喜びの声を上げた。

「穴は塞がったけれど、ゾンビたちの様子はどうだ」

一人だけ冷静な郷土先生。

「広場に行ってみましょう」

広場からは、まだ、ダンシングヒーローの音楽が聞こえていた。郷土先生や中垣たちは、大石の場所から離れ、広場の方に向おうとした。

「あれ。大西のおばあちゃんは？」

中垣はふと気が付いて、辺りを見回す。大石を動かさせたのは大西のおばあちゃんのおかげだ。ゾンビが出てきたのは仕方がないとしても、盆踊りが多くの人に参加して、賑わったのは大西のおばあちゃんのおかげだし、こうして大石が動かさせたのも、気落ちした自分たちを自らが先頭になって大石を動かそうとしてくれたおばあちゃんのおかげだ、最大の功労者と言っても言い過ぎではない。だが、そのヒーローの姿が見当たらない。

「いた」

大西のおばあちゃんは今までどおり、呆けたようにちょうど手ごろな石にちょこんと座っている。

「おばあちゃん。さっきはありがとう」

中垣はおばあちゃんの前に座り

「さあ。行こう」と、手を取る。

「もう、晩御飯かね。先に、お風呂にも入りたいなあ」

元の大西のおばあちゃんに戻っていた。

「火事場のバカ力じゃないけれど、私たちが困っていたので、一時的に正気に戻ったのかもしれないな」

郷土先生が分析をする。

「でも、不思議なのは、今まで、僕たちが全力を尽くして大石を動かそうとしたのに、大西のおばあちゃんが手伝ってくれただけで、大石が動いたんでしょう」

「そうだな。大西のおばあちゃんのおかげで、バラバラだった心が一つになったのと、閾値を超えたのかもしれないな」

「閾値ですか？ どういう意味ですか」

「ほら。物理で習っただろう。ある物体を動かそうとして、力を加えていくと、それまではびくとも動かなかったのに、ある力を越えた瞬間に物体が動き出す、その力の境界だよ」

「それじゃ、僕たちは大石が動くか動かないかの限界まで押していて、大西のおぼちゃんのわずかな力が加わったことで、閾値を超えて大石が動き出した、ということですか？」

「うーん。証明はできないけれど、そういうことかなあ」

中垣は手を携えている大西のおぼあちゃんの方を見る。

「おぼあちゃん。とにかく、本当にありがとう」

手をより一層強く握りしめた。

「夕飯の後は、井戸で冷やしたスイカを食べよう。甘くて美味しいぞ」

既に頭の中には夕飯が並んでいる大西のおぼあちゃんが中垣の顔を見て笑った。中垣も

「うん。ゾンビがいなくなったら、スイカを食べよう」と明るく返事をした。

中垣たちは広場に戻ってきた。しかし、ゾンビたちはまだ踊っていた。

「駄目だ。穴を塞いでも効果はなかったんだ。あんなにしんどい目をしたのに」

中垣はその場にしゃがみ込んだ。さっきの大石を動かした疲れがどっと重力のように体を押しつぶした。

「よし。よし。大丈夫だよ」

自分と同じ背丈になった中垣の頭を大西のおぼちゃんが撫でる。

「いや。そんなことはないぞ」

郷土先生がやぐらの方を指さした。広場は夜が明けてきた。だんだんと空が明るくなってくる。まさに、黒い緞帳が空に上がっていき、その下から、光が差ししてきた。誰かが、やぐらの上に立っている。自治会長の祖父、ゾンビの会長だ。

「おととととと」

ゾンビに脅されるように踊っていた人たちが素っ頓狂な声を上げた。石にでも躓いたのか。いや、違う。目の前で踊っていたゾンビたちが急に立ち止まったのだ。ゾンビたちはやぐらの上のゾンビ会長を見つめている。

朝日がゾンビ会長を差す。ゾンビ会長が両手を上げた。全身で太陽の光を浴びている。逃げる様子はない。反対に、迎え入れているようだ。ゾンビ会長の体全身から白い煙が立ち上っている。燃えているのか。いや、蒸気のような。体中の水分が蒸発しているのだ。

しばらくすると、風が吹いてきた。ゾンビ会長は頭から足元へと崩れていく。砂の城が崩れていくように。その破片が中垣の頭の髪の毛にも降りかかった。頭に手をやる。ぼろぼろになった布きれのようだ。

その時だ。やぐらを取り囲むように踊っていたゾンビたちの姿も全員崩れた。そう砂の人間、いや、土でできた人間のように崩れ、地面と一体化した。それは、やぐらの周りのゾンビたちだけでない。広場を守るように取り囲んでいたゾンビたちも崩れていった。

輪踊りの輪の群れはゾンビが崩れ、歯抜けのようになった。だが、その中でも立ち尽くしているゾンビたちがいる。

「ここはどこだ」

「あれ、私は何をしているの」

「確か、死んだはずのじいちゃんのゾンビに噛まれたんだ」

「そうよ。ばあちゃんのゾンビに襲われるとは思わなかったわ」

立ち尽くしていたゾンビたちの顔に生気が戻った。頬が赤くなり、血行が戻っていく。彼ら、彼女たちは、お墓や地中から出てきた本物のゾンビではなく、本物のゾンビに噛まれ、ゾンビ化した人間だった。

「それにしてもどうしたんだ。体中が痛いぞ」

「あそこにやぐらがあるわ」

「ここは広場だぞ」

「本部テントもある」

「盆踊り大会の横断幕が張っているぞ」

「じゃあ。あたしたちは盆踊りを踊っていたの？」

「そりゃあ。体が痛いはずだ」

「日ごろから運動不足だからかなあ」

「通勤や買い物以外に歩かないもの」

「ここには、子どもの頃、来たことがあるぞ」

「お母さんの実家がある田舎だ」。

「もう、俺も五十歳を過ぎたからなあ。じいちゃんやばあちゃんも死んだんだよな」

「昔、セミやとんぼを捕まえたわ」

「俺なんか、じいちゃんに頼んで、朝、五時くらいに起きて、カブトムシやクワガタムシを捕まえてクヌギ林に行ったぞ。こんな大きかったぞ。それが、今は、デパートやスーパーで売っているんだもんな。時代は変わったよ」

「私は小川で水遊びをしたわ。背中がぞくぞくするくらい水が冷たかったのを思い出したわ。手のひらでメダカを掬ったのよ」

ゾンビから人間に戻った人々は、次々と自分が子どもの頃、ここで遊んだ情景を口にした。だが、自分がゾンビの時に、盆踊りをしたことは覚えていなかった。

「さあ、帰ろうか」

「帰ったら。仕事が待っているわ」

「それにしても。また、ゾンビになるのもいいかもしれないなあ」

「正々堂々と、田舎に帰って来られるものね」

こうして、ゾンビから人間に舞い戻った人々は、ゾンビとなってきた時と同じように、空港では空席待ちで何時間も待ちながら、電車やバスなどの公共交通機関の中では、乗車率二百パーセントを越えた状況で、袖すり合うは汗の源と言わんばかりに、他人の汗や化粧水、ヘアポマードの、単一であれば嫌な臭いはしないものの、複合することで胃液が吐き出るような嫌な臭いになる、そう一個人では普通の人でも、複数になれば派閥ができて、他人を排除する嫌な人になるような、複合臭を嗅ぎながら、自宅へと戻っていった。